

けいざい+ 地域発

人口が減り、残った住民はお年寄りばかり。かつて近海漁業で栄えた三重県南部の東紀州に地域再生の光が見えてきた。手を差し伸べたのは、東京の外食産業。現地で漁業や水産加工を手がけ、本社を移転する構想も打ち出した。何が経営者を動かしたのか――。

3月の早朝。熊野灘に面した三重県尾鷲市の須賀利漁港から、東京の外食産業「ゲイト」の定置網船「八咫丸」が初めて船出した。乗組員は五月女圭一社長(45)ら約10人。8キロ沖の定置網を引き揚げてシマアジやアカイカ、アオリイカを尾鷲港に水揚げした。五月女さんは「喜びは格別だが、先は長い。引き締まる思いで、地道に漁を重ねたい」と話した。

尾鷲市の漁獲量(養殖含む)は2015年、5837トで、26年前(1989

東京の居酒屋 漁業再生

三重で水産加工 本社移転案も



初水揚げされた魚を仕分けするゲイトのスタッフ
3月20日、三重県尾鷲市

年、2万589ト)の3分の1以下に落ち込んだ。足もとの漁業就業者は約360人。約50年でざっと2千人減ったのが響いた。

須賀利も大型カツオ船が操業していた約50年前は1千人ほどが暮らしたが、いまは233人。65歳以上が85%を占める。飲食店もほとんどない。尾鷲市の加藤

千速市長は「(行政として)生活基盤を整えるのが優先で、漁業再生は頭になかった」。

その地域に目をつけたのが、都内で居酒屋11店を運営するゲイトの五月女さんだ。リアス式海岸で水産資源が豊かな点が魅力だった。自身の会社は問屋から年間1億円相当の食材を仕入れる《問屋依存体質》からの脱却を模索していた。

「東日本大震災の後、仕入れ値が急騰し、東京ではホッケやしめさばといった安定供給できる海産物しか入らなかつた。産地の衰退は会社の行く末に関わる。生産側にまわらないといけない」

おととしの秋、尾鷲の隣りの熊野市で水産加工を始めた。地元漁師、戸田聡さん(41)と知り合った縁をいかに、地元で水揚げされたタ

その後、尾鷲の須賀利地区に「支店」を出し、漁業の拠点にした。漁業権を得て、中古漁船4隻を約1千万円で購入。戸田さんが須賀利に移り、地元漁師に業務を委託した。今年3月に操業を始めた。スタッフ4人を中心に、天候が良ければ毎日出漁する。戸田さんは「定置網漁を広げて若い漁師を増やしたい。資源保全にも努めたい」。いまは開始間もないこともあって鮮魚を地元で卸しているが、将来は「くろきん」などゲイトの店への直送を検討している。



その後、尾鷲の須賀利地区に「支店」を出し、漁業の拠点にした。漁業権を得て、中古漁船4隻を約1千万円で購入。戸田さんが須賀利に移り、地元漁師に業務を委託した。今年3月に操業を始めた。スタッフ4人を中心に、天候が良ければ毎日出漁する。戸田さんは「定置網漁を広げて若い漁師を増やしたい。資源保全にも努めたい」。いまは開始間もないこともあって鮮魚を地元で卸しているが、将来は「くろきん」などゲイトの店への直送を検討している。

「漁業だけでなく、地域に活気を取り戻すために打つ手はないのか。月の3分の1を須賀利周辺で過ごすようになった五月女さんは、働く人を増やすことが解決策につながるかと考えた。スタッフに車を支給し、テレビ電話で会議を開催。戸田さん以外にも通い詰めたり、移住を希望したりするスタッフがいる。本社を東京から東紀州に移す構想もある。

それだけではない。民家3軒を購入し、取引先や顧客を計200人ほど須賀利に招いた。移住を促し、地域全体の産業を育てるためだ。ITやデザイナーなど5社ほどが、オフィス開設に関心を示している。

「須賀利は世界で類を見ない少子高齢化のトップランナー。漁業を再生し、取引先を巻き込んで地域を再興するプランを描きたい。それがビジネスモデルになれば、地方の未来を形作る事ができるかもしれない」

(広部憲太郎)

デジタル版に動画

ご意見は、keizai@asahi.comまで。

地方創
各
公正取
独禁法
ら禁地
懸念画
合計

た。
トランプ氏は5日、中国
国から人民元建てで投資で
きる機会が増える。昨年初
シア・フォーラム」で明ら
りにとりなどでの使用が広が
りそうだ。(北京=福田直之